研究ノート

ピエール・ド・ノラックのヴェルサイユ
―ヴェルサイユの復活―

The Palace of Versailles by Pierre de Nolhac
―The Revival of Versailles―

勝山 祐子
Yuko Katsuyama

要旨

フランス革命以降に荒廃したヴェルサイユ宮殿を、現在の総合的な美術館に生まれ変わらせたのがキュレーターのピエール・ド・ノラックである。王政復古期の王ルイ=フィリップはこの宮殿を「フランス歴史美術館」に改造し、第三共和制成立後は行政・立法機関や各種団体がヴェルサイユに陣取っていた。ノラックの企てとは、動乱の時代だった19世紀に何度も大改造の憂き目にあった「過去の王の住居」を、「王の住居」でもただの美術館でもないものに変容させることだった。だから宮殿を隈なく探索し埋もれていた過去の美術・調度品を発掘した。また多くの作品を、購入や他の美術館からの寄託によって収集し、アンシャン・レジームの時代を想起させる空間を再創造したのである。ノラックの作品収集の基準は、作品が偽物ではないこと（学術的正確さ）と美術愛好家を楽しませることだった。だが、庭園の修復を担当した建築家マルセル・ランベールの方法には賛同しなかった。経年を感じさせないまでに修復することには反対だったからだ。過去の痕跡を消し去ることはノラックの美学に反していたのだろう。

●キーワード：マルセル・プルースト（Marcel Proust）／ボニ・ド・カステラーヌ（Boni de Castellane）／ルイ=フィリップ（Louis-Philippe）

Ⅰ．序

ヴェルサイユ宮殿といえば、日本ではなんといっても『ベルサイユのばら』だろう。華麗で優美な宮廷生活を連想するに違いない。新型コロナウイルスの世界的流行がなければ、きっと昨年の夏休みにも多くの観光客が押し寄せたことだろう。まずはルイ14世が建造させた「鏡の間」を見学し、目の眩む思いをするだろう。マリー=アントワネットのファンであれば、彼女の離宮プティ・トリアノンを訪れるに違いない。ヴェルサイユは、17世紀から18世紀に至るアンシャン・レジームの時代の、フランスの栄華を体現するものであり、豪華絢爛たる世界に憧れる者の興味を惹きつけずにはいられない。だから、世界中にファンがいる。ヴェルサイユ最大のメセナの一つがアメリカの*The American Friends of Versailles*であるのは周知の事実である。これは、ヴェルサイユのメセナとして著名なロックフェラー家の２代目ジョン・ディヴィソン・ロックフェラー・ジュニア（John Davison Rockefeller Junior, 1874-1960）の精神と活動を継承する団体だ。彼は1923年、修復資金を募るためにヴェルサイユ宮殿で開催されたチャリティー・パーティーに出席し、これ以降、ヴェルサイユの修復を資金面で援助したのである[1)]。

だが、フランス革命による荒廃、また、革命政府がその打倒を目的にフランスに宣戦布告した隣国と戦わざるを得ず、その資金源としてヴェルサイユ宮殿の調度品を売却したこと、七月王政期にはルイ=フィリップが、フランク王国の創始者クロヴィスにまで遡るフランス王家の歴史を辿る「フランス歴史美術館」（1837年オープン）として大改造し、自らが収集した作品によって埋め尽くしたこと、普仏戦争直後のパリ・コミューンの混乱の中で議会及び政府がヴェルサイユに移転し、それに伴いまたもや大改造が企てられ、ルイ=フィリップによる美術品のコレクションが片付けられてしまったこと、プティ・トリアノンを含む建造物だけではなく庭園の荒廃も著しく、大規模な工事が必要な状態にあったこと、その後1892年になり、ピエール・ド・ノラック（Pierre de NOLHAC）をキュレーターに迎え、やっとヴェルサイユの再興が本格化したことなど、19世紀のヴェルサイユについては、たとえフランス人であろうとも一般には

あまり知られていない。

2019年11月19日に始まり、翌３月15日まで開催される予定だった「ヴェルサイユ・リヴァイヴァル 1867-1937（*Versailles Revival 1867-1937*）」展は、ヴェルサイユの復活に向けた歴史を辿る展覧会だった。コロナ禍の拡大に伴い、３月17日に発布されたフランス全土のロックダウンに先立つ13日には、政府の要請にしたがいヴェルサイユ宮殿自体が閉鎖されたというから、最終日を迎えることは叶わなかったようだが、近年のヴェルサイユで最も重要なイヴェントの一つだったことは間違いない。

この展覧会で大いに注目されたのが、19世紀終わりから20世紀にかけてのヴェルサイユ復活の立役者の一人、ピエール・ド・ノラックである。ヴェルサイユの再興には有力人物の協力が不可欠であることを認識していたノラックは、社交にも精を出し、政治家だけではなくモーリス・バレスやロベール・ド・モンテスキウら、ヴェルサイユに見出せる廃墟の美に敏感な作家と親しく交際、自らが描く全体構想に基づいて復元が進捗するよう努めた[2]。また、リュック・フレス（Luc FRAISSE）の報告によると、プルーストは彼の存在を知っていたのはもちろん、交流もあった。1894年にロベール・ド・モンテスキウが催したマチネ（日中のパーティー）に両者は同席していたのである[3]。だから、マルセル・プルーストのテキストにノラックの名が記されていても驚くにはあたらない。プルーストは次のように書いているが、これは、アルフレッド・ド・ミュッセ（1810-1857）の時代の荒廃したヴェルサイユが、バレスやモンテスキウによって礼賛され、続いてノラックによって復活が叶えられていく歴史を踏まえている。

> ミュッセのいう《退屈なヴェルサイユの庭》[4]が、バレスによって、モンテスキウによって、アンリ・ド・レニエによって、さらにはエルー、ノラック、ローブル、ボルディーニによって、詩人たち、賢人たちがとりわけ好んで滞在する土地となった。[5]

「研究ノート」と呼ぶよりは「研究メモ」ともいうべき本稿が、渡仏もままならない私たちにとって、次なる旅立ちのインスピレ ーションにでもなれば幸いである。コロナ禍にあっても、夢見ることは許されているのだから。

Ⅱ．第二帝政の終焉とヴェルサイユ

筆者がノラックに興味を持つようになったきっかけは、マルセル・プルーストに関する研究である。『失われた時を求めて』の『ゲルマントのほう』の草稿には、シャルリュスによる次のような台詞がある。

> ご存じでしょうが、ド・ノラック氏がヴェルサイユの新しいキュレーターになってからというもの、この魔法の宮殿では毎日のようにこれまで知られていなかった作品が発見されています、まずは家具、振り子時計、胸像、絵画が見つかりましたが、感動的なのは、このような発見をバレエのステップ（パ）が描く線のように結びつけると、これらの作品の隣人、師匠、友人ともいうべき、17世紀に制作されたほかの作品が次々に見つかることです、それどころかしばらく前からは、目も眩むような羽目板を張った広間や、ル・ブランが装飾した階段が見つかったかと思うと、別の日には、宮殿の中の城ともいえる住居がいつくも見つかったりしています。[6]

この台詞の正当性は、ノラックが退職から18年後の1937年に発表した『ヴェルサイユの復活　あるキュレーターの回想 1887-1920（*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920*）』[7]（極めてプルースト的なタイトル！）を読めば明らかである。まずは序文を読みたい。ノラックは、1878年に初めてヴェルサイユを訪れた日を回想しているのである。引用する前に、当時のヴェルサイユについて必要な説明を若干加えたい[8]。

1870年７月に勃発した普仏戦争はプロイセン軍優勢のまま進行し、ヴェルサイユ宮殿をプロセイン軍が占拠するに至り、翌年の１月18日には鏡の間で、ヴィルヘルム１世のドイツ帝国初代皇帝としての戴冠式が行われ、28日には両国の間に休戦協定が発効した。2月14日にはボルドーで、アドルフ・ティエールが行政長官に任命された（実質的な大統領である）。だがパリは、プロイセンによる砲撃は免れたのだが、コミューンの成立を目指す勢力の内乱によって混乱の坩堝にあり、３月１日、ティエールは国民議会をパリからヴェルサイユに移転することを決定した。こうして宮殿内のオペラ劇場が国民議会の議事堂として改造され、国民議会に付随する施設も

ヴェルサイユ宮殿に引っ越すことになった。北翼には議長室と事務局長室が設置された。議員らが睡眠をとるために、なんと鏡の間にベッドが並べられ、共同寝室に改造されたという。３月18日のパリ・コミューンの成立によって、内閣もパリからヴェルサイユに逃亡。こうして議員のみならず、大臣、官僚などがヴェルサイユ宮殿に暮らすことになった！　５月になると、ヴェルサイユ政府軍がパリに侵攻しコミューンからパリを奪取（「血の週間」と呼ばれる）。こうして大臣たちはパリに戻ったが、ティエールはパリの住居を破壊されたためにヴェルサイユに留まり、８月には正式に大統領に任命された。国民議会もまたヴェルサイユ宮殿から離れなかった。ヴェルサイユに腰を据え、第三共和制を確立するために議論を続けていたのだ。その後、1875年の憲法制定によって二院制が採用され、国民議会と元老院の二つの議場が必要になり、ヴェルサイユは更なる大規模な改造を迫られることになった。国会がヴェルサイユを離れパリに帰還したのは、実に1879年のことである。だが、その後も、議会や政府の施設がいくつもヴェルサイユに残った（1871年に国民議会の議場へと改造され、二院制の確立後は元老院の議場になったオペラ劇場は、長きにわたり閉鎖されたまま、少しずつ損なわれていった）。このような経緯によって、ヴェルサイユは政治権力の象徴としての機能を果たすことになったのである。その代表的な例が、ロシア皇帝ニコラス２世の歓迎レセプション（1896年）と第一次世界大戦のパリ講和会議（1919年）だろう。パリ講和会議はヴェルサイユに世界の耳目を集め、とりわけアメリカ人の興味を惹くことになった。政治の舞台となったヴェルサイユは、観光資源としての価値をも見出されることになるのである。

ここで注目したいのは次の２点である。まずは、議会がヴェルサイユを離れたのが1879年だったこと。続いて、スマラ（アルジェリアで「部族」を表す言葉）の間、コンスタンティーヌの間、クリミアの間に議会付属の図書館が設置されたことである。このスマラの間、コンスタンティーヌの間、クリミアの間は、ルイ=フィリップが制作させた作品を展示するための空間だった[9]。だからノラックは、1878年に初めてヴェルサイユを訪れた日を回想しながら、『ヴェルサイユの復活』の序文で次のように書いているのである（この日のヴェルサイユには、まだ議会が陣取っていたことに注意しよう）。

> 元老院の図書館となった巨大な広間の本棚の背後に、オラース・ヴェルネがアルジェリアの田舎、つまりコンスタンティーヌの攻囲線を描いた作品群が隠されていたことを、この時代にあって、誰が信じられただろうか？　そしてこの若い見学者［＊若きノラックのこと］には、ある日自らが、ヴェルサイユに国会が置かれていた時代の名残の全てを消去しなければならなくなろうなどと、予想することができただろうか？[10]

残念ながらここでノラックが言及しているのは、17世紀から18世紀の画家ではなく、19世紀のオラース・ヴェルネだ。彼は、ルイ=フィリップがヴェルサイユ宮殿を転用して設立した「フランス歴史美術館」のために、戦闘場面を題材にした多くの大作を制作したのだった。しかしながら、ヴェルサイユ宮殿が、その内部に過去を幾重にも塗り込めながら完成した空間であることを示していることに変わりはない。この一節からは、先に引用したプルーストの言葉の正当性が理解されるだろう。そもそも、17世紀（ルイ14世）のヴェルサイユと18世紀（ルイ15世から16世）のヴェルサイユは同じではないのだ。ルイ15世も16世も、大規模な改築をやめなかったのだから。プルーストは中世に建造された教会を「四次元空間」であると、そしてその「四番目の次元は時である[11]」と書いた。ヴェルサイユもまた、「四次元空間」であることに納得するしかない。ノラックの仕事のプロセスは、まさにヴェルサイユの「四番目の次元」を浮き彫りにすることになった。

Ⅲ．ピエール・ド・ノラックとは？

ノラックは数々の著作を発表している。ヴェルサイユやマリー=アントワネットに関する書物はもちろん、象徴派の詩人として詩集を出版、あるいはペトラルカなどのイタリアン・ルネサンスの作家に関する研究書も執筆している。また、ヴェルサイユのキュレーターとしての調査が基礎になったのだろう、18世紀の画家――ユベール・ロベールやフラゴナール――に関する書籍も多数発表している。筆者も、1910年に出版されたユベール・ロベールの伝記『ユベール・ロベール 1733-1808（*Hubert Robert 1733-1808*）』[12] を所有しているが、画家の作品の複製が多数掲載され、画家の全貌を一挙に知ることのできる有益かつ楽しい書物である。だが、ペトラルカの専門家が、いったいどのような経緯でヴェルサイユの復

興を牽引することになったのであろうか？[13]

ノラックは、1859年にフランス中南部にある小さな町アンベールに誕生した。初めてヴェルサイユを訪れたのは18歳の時になる。16世紀文学の研究のためにパリに上京したのち、ローマでペトラルカに関する博士論文を執筆、1885年には帰国してフランス国立図書館で研修生となり、翌年にはヴェルサイユ美術館の学芸員になった。当時の館長は画家のシャルル・ゴスラン（Charles GOSSELIN）である。ノラック本人によれば、当時のヴェルサイユは「最も敬遠されるポスト」だったという。ノラック自身も国立図書館の版画部門で働くことを望んでいたのだが、採用試験に不合格になったのである！　つまり不本意ながらの着任だった[14]。ノラックは週に３度パリからヴェルサイユに通うことになったのだが[15]、その頃のヴェルサイユ宮殿は「がらんとして家具も何もなかった[16]」。しかし、のちに回想しているように、これは「幸運」でもあったのだ[17]。ヴェルサイユに勤務するようになったノラックは、1890年にはマリー=アントワネットの伝記を発表し、これはなんと24回以上も重版されたという[18]。1889年にはヴェルサイユ宮殿が国立美術館になったことを補足したい[19]。1892年、館長のゴスランが死去、ノラックがその後継者に任命され、1919年までヴェルサイユ美術館の館長としてヴェルサイユの復興に尽力することになった。リオネル・アルサック（Lionel ARSAC）によれば、ノラックの功績とは美術・工芸品のコレクションを充実させ、一般的なヴェルサイユのイメージを刷新、美術館としてのあり方を根本的に変革し、現在の私たちが知るヴェルサイユの礎を築いたことにある[20]。次にヴェルサイユにおけるノラックの歩みをもう少し詳細に見ていこう。

普仏戦争の最中にナポレオン３世が退位したのは1870年のこと、こうしてフランスは第三共和制に移行した。当初は王党派が再度の王政復古を目論んでいたが、多くのフランス市民は共和派（レピュブリカン）を自認するようになり、自由主義が浸透していったといえる（もちろん王党派は存在し続けたのだが、これは本稿の主旨ではない）。だから、ノラックがヴェルサイユに着任した当時のフランス人は、過去に王の住居だったヴェルサイユにさして興味を示さなかったのである。フランス人にとって19世紀は、暴動・革命・戦争が繰り返された時代で、政治体制だけでも、以下のように目まぐるしく変容し、その間にも暴動やクーデターの企てが絶えなかったのだ（ヴィクトル・ユゴーが、王政復古の時代を舞台にする『レ・ミゼラブル』において描いたとおりである）。そしてその度に、ヴェルサイユの機能も変化したのである。

1789年　フランス革命の開始
1799年　ナポレオンによる第一帝政
1814年　ブルボン王朝による王政復古（ルイ18世の即位）
1830年　七月革命によるオルレアン朝の成立（ルイ=フィリップの即位）
＊「フランス歴史美術館」がヴェルサイユ宮殿に開館したのは1837年のこと。
1848年　二月革命による第二共和制の成立。同年、ナポレオン３世による第二帝政への移行
＊1855年、ナポレオン３世は、イギリスの女王ヴィクトリアをもてなすための歓迎レセプションをヴェルサイユで開催した。だが彼は、ヴェルサイユに特別な興味があったわけではなく、ヴェルサイユを外交に利用したのである。反対に、皇后ウージェニーはマリー=アントワネットの大ファンで、1867年のパリ万博を機に、プティ・トリアノンでマリー=アントワネット展を開催したのだが、本稿では触れない[21]。
1870年　普仏戦争中に第三共和制が成立
1871年　パリで二ヶ月にわたりコミューンが成立。ヴェルサイユに政府と議会が移転

ヴェルサイユの名が当時の人々に想起させるものは、現代の私たちが想像するようなアンシャン・レジームの華麗な宮廷生活というよりは、生々しい政治史だったのだろう。しかも広大な庭園は荒廃し、廃墟となっていたのである。

また、ノラックによれば、ルイ=フィリップの指示で宮殿の壁を埋め尽くした歴代の王の戦功を讃える絵画や、ナポレオン３世の治世下に購入した巨大な作品は、普仏戦争の敗北によって色褪せて見えることになった[22]。ヴェルサイユの庭園といえば、ヴェネチアのカナル・グランデから着想した巨大な水路や、点在する池や噴水などで有名だが、これらの損傷には著しいものがあったようである[23]。

またノラックは、次のような文化史的文脈を強調して

いる。19世紀半ばまではロマン主義の時代だったが、ロマン主義といえば中世を再発見・再評価した芸術運動であり、ロマン主義者にとってフランスの歴史的モニュメントといえば、中世の建造物だったのだ。ルイ=フィリップによって1834年に歴史的記念建造物総監督官に任命された、『カルメン』の作者でもあるプロスペル・メリメの業績を見れば一目瞭然である（メリメの仕事は、修復の必要なモニュメントのリストを作成することで、それは古代から16世紀までのモニュメントで占められていたことを補足したい）。ミュッセが「退屈なヴェルサイユの庭」と書いたのも、ロマン主義の時代にあっては驚くことではなかったのだ。しかしノラックによれば、彼がヴェルサイユの復興に乗り出した時代には、ロマン主義は過去のものになりつつあった。その意味では、機は熟しつつあった[24]。

Ⅳ．アンシャン・レジームへの回帰――王の住居

こうして、ヴェルサイユの復興に向けてノラックは歩み始めることになる。まずは、宮殿の地上階に陣取る各種団体に退去してもらわねばならなかった（だが、ルイ15世の愛人の一人だったデュ・バリー夫人の住居（アパルトマン）や図書館は議会が引き続き使用することになり、ヴェルサイユに返還されなかった）。続いて着手したのが、ルイ=フィリップによって1837年に設立された「フランス歴史美術館」の「破壊」である[25]。ノラックにとってヴェルサイユとは、何よりもまず過去に王の住居だった場所なのである。もはやそこに住む王はいないのだからそれは住居ではない。だが、単なる美術館でもない。だから第三の道を見出さねばならない[26]。まずは、革命以前のヴェルサイユに回帰しよう。それがノラックの志向したものだった。「革命を企てる者にとって［…］達成すべき目的とは」、「自らが破壊したばかりの過去のうち、何一つとして復元されないことである[27]」とノラックは述べているのである。「革命を企てる者」、それはノラック自身だ。ノラックにとって革命とは、直近の過去を破壊し遠い過去へと回帰すること、そしてそこから出発するものだったのだろう。こうして、ルイ=フィリップが設立した「フランス歴史美術館」は解体されることになった。

ノラックは、宮殿に残されていた絵画の裏を見ると、それらがどんな不幸に見舞われたのかが分かると述べている。

> ほとんどの場合、絵のサイズが変更されていた。ファン・デル・ミューレンやマルタンやランファンら［17世紀から18世紀の宮廷画家］の作品は、ルイ=フィリップによって天井の高い部屋をあてがわれていたが、高さを合わせるために空の部分が付け足された結果、面積が元の二倍になっている場合もあった。間をおかず、これらの作品は余計な部分が削り取られることになり、空の断片や雲の塊が修復家のアトリエを埋め尽くすことになった。容赦なく削ったのだ。もっと深刻なのは、ルイ=フィリップの時代に小さくされてしまった作品の場合だ。歴史美術館の職員は、国王ルイ=フィリップによる指示のとおりに壁に飾るために、絵画を裁断することも厭わなかったのだ。しかし多くの場合は、あらかじめ小さくした枠の裏に、邪魔になる部分を折り込んであるだけだった。[28]

ルイ=フィリップによる芸術作品に対する破壊行為（ヴァンダリスム）が、公然と行われていたというしかない。これらをできるかぎり元の状態に戻すこと、これがノラックの最初の仕事であった。今や、ルイ=フィリップが作り上げた美術館こそが破壊される番なのである。

アルサックによれば、宮殿の中央棟の大理石の中庭に面する側に造られた「王たちの間」には、ルイ=フィリップが制作させた歴代の王たちの彫像が展示されていたが、これらは撤去された。王太子の住居（アパルトマン）を構成する部屋には歴代の大元帥・海軍の提督・元帥のポートレートが飾られていたが、これらも取り外された。そして1899年から翌年にかけて、18世紀に捧げられる空間として整備された。1909年には、ルイ15世の私生児として誕生した王女たちの住居（アパルトマン）を、やはりルイ15世と16世の治世を再現する空間として改修した。こうして、18世紀のヴェルサイユ宮殿を復活させる企ては完成に近づいた。ルイ14世と晩年の妻マントノン夫人の住居（アパルトマン）は17世紀に捧げられた。注目すべきことは、「グラン・ザパルトマン」のために、17世紀に制作された一連のタペストリー『ルイ14世記（*l'Histoire du Roi*）』が、モビリエ・ナショナル（Mobilier national 国有動産管理局）から1907年に寄託されたことだ[29]。ノラックの最大の功績とは、モビリエ・ナショナルやルーヴル美術館の所有だった家具調度品や絵画作品のヴェルサイユへの寄託を実現したことにあるのである[30]。こうして、「がらんとして家具も何もなかっ

た」宮殿の居室が、アンシャン・レジームの時代を想起させる空間として蘇ったのだった。

Ⅴ．ヴェルサイユ美術館の二つの機能――歴史と美術と

だからといって、歴史美術館としての役割を放棄したわけではない。ルイ=フィリップの「フランス歴史美術館」の中でも最も象徴的な展示室は残されることになった。例えば「戦争の回廊（ギャラリー）」である。フランク王国から19世紀に至るフランス史の中で、最も重要な戦争を描いた大作（どれも19世紀の制作である）が壁一面に展示されている。この回廊（ギャラリー）は、ヴェルサイユで最も巨大なことでも知られる。ルイ=フィリップが、自らの軍のアルジェリアにおける戦功を顕彰するためにオラース・ヴェルネに制作させた作品群が展示される「アフリカの間」も、今なお見学することができる（これはノラックが、『ヴェルサイユの復活』の序文で言及している作品だ）。同じく19世紀の画家が制作した、十字軍の遠征を題材にした作品なども撤去されず、今も鑑賞することができる（「十字軍の間」）[31]。つまり、ノラックのキュレーターとしての基準に適った展示は、そのまま残されたといってよい。

また1899年になると、ノラックは、フランス革命から第二帝政に至る時代を描く「傑作絵画」を展示する空間をも生み出した。これらには、ユベール・ロベールが革命を題材に制作した『革命派市民組織の祭典（*La Fête de la fédération*）』のような、18世紀末の作品も含まれていた[32]。これは1790年にパリのシャン・デ・マルスで開催された祭典を描いた作品である。ヴェルサイユ美術館がネット上で公開している来歴によれば[33]、1847年にルイ=フィリップに寄贈され、ヴェルサイユ宮殿の所蔵となった。この展示室の成立には７年の歳月を要したというから、第一次世界大戦の真っ最中に完成したことになる。つまり、美術作品によって歴史を辿るという「フランス歴史美術館」の精神は尊重されたのである。ノラックの基準とは、何よりもまず模作ではなく原画であること、そして、個々の作品の題材や作者などの学術的な情報に誤りがないかどうかである（端的にいえば本物かどうかということだ）。基準を満たすかどうかを判断するのに、ノラックは徹底した調査や考証を行った。アルサックによれば、ノラックがヴェルサイユ宮殿にもたらしたものは、当時の美術愛好家が美術館に求めるものに適っていた。つまり、美術館を訪れることによって得られる「知識と悦楽」である。専門家にも評価され、大衆にも愛される美術館、これがノラックのヴェルサイユ美術館なのだ[34]。

Ⅵ．ヴェルサイユの屋根裏

ここで、先に引用した『失われた時を求めて』の草稿に戻りたい。シャルリュス男爵によると、存在の知られていなかった調度品や芸術作品がノラックによって毎日のように発見されているという。ノラックの『ヴェルサイユの復活』によれば、国民議会の移転に伴う大改造の結果、倉庫となってしまった部屋がヴェルサイユには無数にあり、そこには多くの作品が眠っていた[35]。ノラックは着任当初からそれらを探索していたようだ。もちろん、ルイ=フィリップが収集した傑作も見つかったのだが、そればかりかアンシャン・レジームの時代の作品も多数埋もれていたのである。

例えば、山積みになった絵画の木枠や巻物の中から、ルイ15世の治世の宮廷画家、ラルジリエールやナティエの作品が見つかったという[36]。ノラックはナティエに心酔するようになり本を執筆[37]。また、ナティエに捧げる空間を南翼の最上階の階段に作り、そこに女性画家ヴィジェ=ルブランの作品を一緒に展示することになった[38]。

また、「第三章　新しい美術館」でノラックは次のように記している。

> このような思いがけない発見は、往時に基づいてヴェルサイユを刷新する過程では、まったく珍しいことではなかった。ある日、倉庫から扉の上部を飾った木材が見つかったので、パリのヴァンドーム広場にあった古い屋敷が解体された際に引き取った、ブッシェの作品の複製である四枚の佳作をはめこんで、振り子時計の小部屋に設置した［…］。[39]

右腕ともいうべきアンドレ・ピラテ（André PIRATÉ）の協力のもと、ほかの国立美術館からの寄託や所蔵品の交換を実現しただけではなく、美術品を購入することもあった。だが、倉庫から美術品や調度品の傑作を発見し、それらに相応しい場所に相応しい形で展示することもあったのである。ノラックは次のように書いている。

> ヴェルサイユ宮殿の人気が原因で、ルーヴル美術館は不当にも気分を害したのだった。伝説が誕生した。私たちは「ヴェルサイユの屋根裏」で無数の未知の傑作を発見したのである。どう

してルーヴルの「屋根裏」でも同じ探索をしないのか？[40]

ノラックの自負の現れた一節である。

再度プルーストのテキストに戻りたい。シャルリュスは「ルブランが装飾した階段」が見つかったと述べている。これはおそらくルイ14世が建造させた「大使たちの階段」を意味する。ところで、モンテスキウに並ぶベル・エポックを代表するダンディに、ボニファス・ド・カステラーヌ（通称ボニ）という貴族がいた。モンテスキウに負けぬ古い家柄の出身である。彼がアメリカから迎えた妻アンナ・グールドの持参金で、1896年から1902年にかけてパリ16区のマラコフ大通り122番地に、パレ・ローズ（バラ色大理石の宮殿）と呼ばれる大豪邸を建造したことは有名である。この屋敷のファサードは、ヴェルサイユの離宮グラン・トリアノンの様式を模したものだという。そして内部はヴェルサイユ宮殿に倣ったものだった。とりわけ見事だったのが、大階段である。これは、エリック・マンシヨン=リゴ（Éric MENSION-RIGAU）によると、ヴェルサイユ宮殿にルイ14世によって建造された「大階段（le Grand Degré）」、別名「大使たちの階段（l'escalier des Ambassadeurs）」から着想したものである。ヴェルサイユの大階段は宮廷建築家ル・ヴォー（Le Vau）の構想に基づき、フランソワ・ドルベー（François d'Orbay）が設計し、ル・ブランとファン・デル・ミューレンによって装飾が施されたという。だがこれは、1752年にルイ15世によって破壊されてしまったのである！　パレ・ローズの大階段の天井画はエクトール・デプイ（Hector D'Espouy）によるもので、この習作は「ヴェルサイユ・リヴァイヴァル1867-1937」展のカタログで見ることができる（パリ市立カルナヴァレ美術館所蔵）。この大階段を見たノラックは「幸福な成功」と述べた[41]。ノラックはヴェルサイユの大階段について、1900年に美術誌*La Revue de l'art ancien et moderne* 1月号に、「ヴェルサイユの芸術。大使たちの階段（*L'art de Versailles. L'escalier des ambassadeurs*）」[42]という記事を発表し、自らの調査の結果を公表している。ノラックの調査がなければ、パレ・ローズの大階段も設営されることはなかったのかもしれない。

だが、ボニの度を越した浪費と愛のない生活にうんざりした妻アンナが離婚を決意すると（彼女はボニの従兄弟サガン大公と再婚することになる）、ボニはパレ・ローズを立ち去るほかはなく、その後曲折を経て、1969年、パレ・ローズは破壊されてしまったのだった。豪勢というものは儚いものである。ノラックのような、情熱と知性と手練手管をかね備えた者が現れないかぎりは。

Ⅶ. 結び――庭園

宮殿だけがヴェルサイユなのではない。森ともいうべき巨大な庭園の存在を忘れてはならない。ルイ14世の時代にル・ノートルを中心に造成された均整の取れた庭園には、ルイ16世の時代に設計された風景式庭園が点在している。また、池や噴水も百年にわたって建造、あるいは改築され続けた。しかも革命以後、庭園は荒廃し、庭園を彩った彫刻はヴェルサイユの倉庫で眠っていた。

ノラックは庭園に関する書物も複数執筆している。だが、庭園の修復には建築家でなければ関われない。庭園の復興に携わったのは建築家マルセル・ランベール（Marcel LAMBERT）だった。アルサックによると、ノラックはランベールの方法論に反感を持っていた。彼は直し過ぎるのである。ここには、ヴィオレ・ル・デュックによって牽引された歴史的モニュメントの修復にまつわる議論に違わぬ問題提起が見出せる。新品と見紛うばかりに修復されたモニュメントからは、プルーストもしばしば言及する経年によって生まれた美は奪われてしまうのであり、これこそが「破壊行為（ヴァンダリスム）」であるとノラックは考えた。筆者もノラックに賛同したい。人工の廃墟を点在させた18世紀の風景式庭園の美学が体現するように、庭園とは自然と人為の融合であり、自然の時の浸食こそが庭園の美を生み出すものなのだ。そもそもヴェルサイユには、ユベール・ロベールが設計した噴水や庭園もあるではないか（「アポロンの水浴の木立」とプティ・トリアノンの「アモー」）[43]。

政治的手腕に長けたノラックは、少なくとも館長のポストにある間には、公然とランベールを批判することはなかったという。だが、アルサックによると、彼はバレスやモンテスキウら、廃墟の美に敏感な作家などに情報を流すことによって、反ランベール・キャンペーンに加担していたようなのだ[44]。筆者は思う。ノラックにとってヴェルサイユにおける革命とは、過去への回帰だった。それは過去の痕跡を消し去らないことである。経年を感じさせないほどの修復は、ノラックの望むヴェルサイユの復活ではなかったのだ。確かにナショナリズムと無縁だとは言い切れないが、過去の栄華こそが、ノラックがヴェルサイユの復活に顕現させたかったものだった。栄

華も豪勢も儚いものだから。

注

1）ヴェルサイユ宮殿の公式WEBサイトでも、ヴェルサイユの歴史を彩る重要人物の一人として、彼の名は顕彰されている。URL は以下である。
http://www.chateauversailles.fr/decouvrir/histoire/grands-personnages/john-rockefeller-jr#versailles,-"tresor-international-de-la-france

2）Lionel ARSAC, «Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937*, le catalogue de l'exposition, Paris, In Fine Éditions, 2019, pp. 150-157.

3）«Proust et la société de Versailles d'après le fonds Pierre de Nolhac», in *Proust et Versailles*, colloque organisé par le Centre de recherche du château de Versailles et l'Institut universitaire de France, au château de Versailles, 20 octobre 2017. この発表は Centre de recherche du château de Versailles の公式WEBサイトで聴取した。なお、このシンポジウムの収録集は、フレスによる編集の元、エルマン社から出版されている（Paris, Éditions Hermann, 2018）。この発表によると、プルーストはノラックが父親を亡くした際には弔電を送ってもいる。また、レーナルド・アーンは、義理の兄に当たるフェデリコ・マドラゾ（アーンの姉の夫で、フォルチュニィの母方の叔父）がヴェルサイユに屋敷を所有していたため、ノラックと親しく交際するようになり、ノラックの *Histoire de Versailles. L'Architecture, la Décoration, les Œuvres d'art, les Parcs et les Jardins, le Grand et le Petit Trianon*（Paris, Société d'éditions d'artistiques, 1899-1900）を熟読していた。

4）ミュッセの詩編 *Sur trois marches de marbre rose*に見られる表現については、ノラックも度々自著で言及している。例えば、*Les Jardins de Versailles*, Paris, Goupil & Cie, 1906, p. 10, et *La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920*, Paris, Mon Autre Librairie, 2020,（la première édition, Paris, Éditions Plon, 1937）, p. 30. なお、以下、ノラックの著作からの和訳は全て筆者による。

5）«John Ruskin : Les Pierres de Venise. Traduit par Mme Mathilde P. Crémieux. Préface de M. Robert de la Sizeranne», in *Contre Sainte-Beuve*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Éditions Gallimard, 1971, pp. 520-523, p. 520. この書評の執筆は1906年。和訳は岩崎力による（『プルースト全集14』筑摩書房、1986年）。ここに列挙される人物たちは、プレイヤード版の注釈者の簡潔な説明によると「散文作家、二人の詩人、版画家、学識者、二人の画家」（*ibid*., p. 922, la note 9 de la page 520）である（和訳は筆者）。また、ヴェルサイユからレーナルド・アーンに送った、17世紀の女性作家セヴィニエ夫人のパスティッシュからなる書簡の中でも、プルーストはノラックの名を引用している（*Correspondance de Marcel Proust, t. V,* texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Paris, Éditions Plon, 1979, p. 174）。コルブはこの書簡が、1905年５月に書かれたと推測している。また、プルーストがエルー（Paul Helleu）の油絵 *Automne versaillais* を所有していたことを付け加えたい。これは現在オルセー美術館からブレスト県立美術館に寄託されている（Lionel ARSAC, «Versailles au temps de Proust : le musée et les jardins, in *Proust et Versailles, op. cit*., pp. 48-91, p. 50）。

6）*À la recherche du temps perdu, t. II*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Éditions Gallimard, 1988, p. 1818, la variante *b* de la page 852. 和訳は筆者による。このシャルリュスの言葉は、ゲルマント大公妃の屋敷の歴史的価値を話者に説明する長台詞の中に見られるものである。

7）これ以後、このノラックの著作は『ヴェルサイユの復活』と記す。

8）以下の1870年代のヴェルサイユ宮殿については、以下の論考を参照した。Fabien OPPERMANN, «La renaissance politique de Versailles», in *Versailles Revival, 1867-1937, op. cit*., pp. 114-125.

9）*Ibid*., p. 117.

10）*Op. cit*., p. 2. アルジェリアのコンスタンティーヌの攻囲線について補足したい。フランスは1834年にアルジェリアを併合するが、これに反発するアルジェリア人によって武装闘争が始まる。これを鎮圧するためにルイ=フィリップはアルジェリアに軍を派遣し、軍は1837年には軍事都市コンスタンティーヌを攻撃、抵抗軍を敗北に導くことになる。オラース・ヴェルネはこの攻囲線を描いた一連の大作を制作した 。これらはヴェルサイユ宮殿の「アフリカの間」で見学することができる。

11）*À la recherche du temps perdu, t. I*, «Bibliothèque de la Pléiade», Éditions Gallimard, 1987, p. 60. 和訳は筆者による。

12）Paris, Goupil & Cie, 1910.

13）以下のノラックに関する詳細は、言及がないかぎり次の論考を参照している。Lionel ARSAC, «Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit*., pp. 150-157.

14）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920, op. cit*., p. 8.

15）*Iibdi*., p. 9.

16）Pierre de NOLHAC, *Versailles et Trianon*, illustration de René BINET, Paris, Hachette, 1909, p. 21.

17）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920, op. cit*., p. 8.

18）Lionel ARSAC, «Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit*., p. 150, la note 5. ノラックの著作は以下。*La Reine Marie-Antoinette*, Paris, Boussod Valadon et Cie éditeurs, 1890.

19）Lionel ARSAC, «Versailles au temps de Proust : le musée et les jardins», in *Proust et Versailles, op. cit*., p. 49, la note 6.

20）«Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit*., p. 150.

21）Christophe PINCEMAILLE, «L'Impératrice Eugénie et Marie-Antoinette autour de l'exposition rétrospective des souvenirs de la Reine au Petit Trianon en 1867», in *Versalia. Revue de la Société des Amis de Versailles*, n° 6, 2003, pp. 124-134.

22）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920, op. cit*., p. 7.

23）*Ibid*., pp. 7-8.

24）*Ibid*., pp. 29-30.

25）Lionel ARSAC, «Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit*., p. 152.

26）Élisabeth CAUDE, «Le remeublement : les premiers pas d'une renaissance, 1860-1936», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit*., pp. 178-183, p. 180.

27）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920*, *op. cit.*, pp. 32-33.
28）*Ibid.*, p. 33.
29）«Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, p. 152.
30）Élisabeth CAUDE, «Le remeublement : les premiers pas d'une renaissance, 1860-1936», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, pp. 178-183.
31）Lionel ARSAC, «Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, p. 152.
32）Pierre de Nolhac, *La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920, op. cit.*, p. 58.
33）URLは以下。 http://collections.chateauversailles.fr/#9dc65fc9-ddb5-4aad-8eb1-2c56f0bbd002
34）«Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, p. 154.
35）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920, op. cit.*, p. 36.
36）*Idem*.
37）*Op. cit.*, p. 41. ノラックが執筆した、ナティエに関する著作は以下。 *Nattier. Peintre de la cour de Louis XV*, Paris, Manzi, Joyant et Cie, 1910.
38）*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920*, *op. cit.*, pp. 41-42.
39）*Op. cit.*, p. 54.「振り子時計の小部屋（le cabinet de la Pendule）」とはルイ15世が作らせた私的な小部屋のこと。
40）*Op. cit.*, p. 43.
41）«Boni de Castellane et le palais rose», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, pp. 290-295, p. 290. この言葉は、筆者が参照した2020年版の*La Résurrection de Versailles. Souvenir d'un conservateur 1887-1920*（*op. cit.*）の 189 ページに見出せる。ボニ・ド・カステラーヌの、特異な性格を思わせる描写も見られる。
42）*T. VII*, en janvier 1910, pp. 54-68.
43）次の拙稿を参照していただきたい。「時間の夢、夢の時間――プルーストにおけるユベール・ロベールの庭――」（文化学園大学紀要 人文・社会科学研究 第21集、2013年、pp. 31–48）、及び「月光を浴びるパリの庭―プルーストの小説におけるパリの一側面―」（文化学園大学紀要 人文・社会科学研究 第22集、2014 年、pp. 49–68）。
44）«Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937, op. cit.*, pp. 156-157.

参考文献

Lionel ARSAC, «Versailles au temps de Proust : le musée et les jardins, in *Proust et Versailles*, Paris, Éditions Hermann, 2018, pp. 48-91.

-«Pierre de Nolhac, fondateur du musée moderne de Versailles», in *Versailles Revival 1867-1937*, le catalogue de l'exposition, Paris, In Fine Éditions, 2019, pp. 150-157.

Élisabeth CAUDE, «Le remeublement : les premiers pas d'une renaissance, 1860-1936», in *Versailles Revival 1867-1937*, le catalogue de l'exposition, Paris, In Fine Éditions, 2019, pp. 178-183.

Luc FRAISSE, «Proust et la société de Versailles d'après le fonds Pierre de Nolhac», in *Proust et Versailles*, colloque organisé par le Centre de recherche du château de Versailles et l'Institut universitaire de France［château de Versailles, 20 octobre 2017］.

Éric MENSION-RIGAU, «Boni de Castellane et le palais rose», in *Versailles Revival 1867-1937*, le catalogue de l'exposition, Paris, In Fine Éditions, 2019, pp. 290-295.

Pierre de NOLHAC, *La Reine Marie-Antoinette*, Paris, Boussod Valadon et Cie éditeurs, 1890.

-*Histoire de Versailles. L'Architecture, la Décoration, les Œuvres d'art, les Parcs et les Jardins, le Grand et le Petit Trianon*, Paris, Société d'éditions d'artistiques, 1899-1900.

-*Les Jardins de Versailles*, Paris, Goupil & Cie, 1906.

-*Versailles et Trianon*, illustration de René BINET, Paris, Hachette, 1909.

-«L'art de Versailles. L'escalier des ambassadeurs», in *La Revue de l'art ancien et moderne, t. VII*, en janvier 1910, pp. 54-68.

-*Hubert Robert 1733-1808*, Paris, Goupil & Cie, 1910.

-*Nattier. Peintre de la cour de Louis XV*, Paris, Manzi, Joyant et Cie, 1910.

-*La Résurrection de Versailles. Souvenirs d'un conservateur 1887-1920*, Paris, Mon Autre Librairie, 2020, la première édition, Paris, Éditions Plon, 1937.

Fabien OPPERMANN, «La renaissance politique de Versailles», in *Versailles Revival, 1867-1937*, le catalogue de l'exposition, Paris, In Fine Éditions, 2019, pp. 114-125.

Christophe PINCEMAILLE, «L'Impératrice Eugénie et Marie-Antoinette autour de l'exposition rétrospective des souvenirs de la Reine au Petit Trianon en 1867», in *Versalia. Revue de la Société des Amis de Versailles*, n° 6, 2003, pp. 124-134.

Marcel PROUST, «*John Ruskin : Les Pierres de Venise*. Traduit par Mme Mathilde P. Crémieux. Préface de M. Robert de la Sizeranne», in *Contre Sainte-Beuve*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Éditions Gallimard, 1971, pp. 520-523.

-*À la recherche du temps perdu, t. I*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Éditions Gallimard, 1987.

-*À la recherche du temps perdu, t. II*, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Éditions Gallimard, 1988.

-*Correspondance de Marcel Proust, t. V*, texte établi, présenté et annoté par Philip Kolb, Paris, Éditions Plon, 1979.

『プルースト全集14』岩崎力訳、筑摩書房、1986 年。

勝山祐子「時間の夢、夢の時間――プルーストにおけるユベール・ロベールの庭――」文化学園大学紀要 人文・社会科学研究 第21集、2013年、pp. 31–48。

-「月光を浴びるパリの庭―プルーストの小説におけるパリの一側面―」文化学園大学紀要 人文・社会科学研究 第22集、2014 年、pp. 49–68。

http://www.chateauversailles.fr/decouvrir/histoire/grands-personnages/john-rockefeller-jr#versailles,-"tresor-international-de-la-france

http://collections.chateauversailles.fr/#9dc65fc9-ddb5-4aad-8eb1-2c56f0bbd002